



説教要旨 「そこのけそこのけイエスが通る」

ルカによる福音書18章35～43節

「ナザレのイエスのお通りだ」(37節)と聞いた盲人は「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(38節)と叫びました。しかし先に行く人々、つまり一行を先導していた弟子たちは、この盲人を叱りつけて黙らせようとします。イエス様がいよいよエルサレムに入ろうとしておられる大事な時に、一人の盲目の物乞いに関わることはできないと考えたのでしょうか。しかし盲人は黙るどころか、ますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」(39節)と叫び続けました。そして、その声はイエス様に届いたのです。イエス様は立ち止まって、盲人をそばに連れてくるように命じ、盲人を癒しました。見えるようになった彼は、神をほめたたえ、イエス様に従う者とされたのです。

ルカによる福音書はこれまで、イエス様の言葉を表面的にしか理解できず、イエス様の思いに反して振る舞う、無理解な弟子たちの姿を描いてきましたが、この箇所でも、イエス様と弟子たちとの間にあった大きな溝が描かれています。

憐れみを求める盲人を叱りつけて黙らせようとする弟子たち。彼らに悪気はなかったでしょう。イエス様を思えばこそ、イエス様を患わせてはいけなと思っての行動だったかもしれません。しかし、結果としてみれば、それはイエス様の思いとはかけ離れた行動でした。かつて、弟子たちもこの盲人と同じようにイエス様によって救われ、喜びをもってイエス様に従う者となったのです。しかし、その喜びのあまりにいつしか、イエス様を手の届かない存在にしてしまうのです。高く高く祭り上げて、ちょっとやそっと手を伸ばしたくらいでは届かないほどです。イエス様の救いを求める人々を、主の憐れみを求める人々を叱りつけ、イエス様から遠ざかろうとしてしまうのです。

私たちもこの盲人のように、ただ主に憐れみをこうしかないものであったはずで、何一つお返しするものを持たない、見捨てられて当然の存在です。そのような私たちを、主は憐れんでくださり、共にいてくださることを約束してくださいました。